

「活きた学問」について

田 中 一 弘

はじめに：実学あるいは「活きた学問」

新たに大学生となった読者のみなさんは、「学問」と聞いてどんな言葉を連想するでしょうか。受験を終えたばかりでまず思い浮かぶのは「学問の神様」かも知れません。他にも「学問の自由」、『学問のすゝめ』、「耳学問」、いろいろありますが、「学問」というとどこことなく古色を帯びた印象を受ける人も少なくないのではないのでしょうか。その「学問」という言葉を敢えて真正面からとらえてあれこれ考えていくのが、この小論です。

みなさんはこれから大学で「学問」をすることになるのですが、「社会科学の総合大学」としての私たちの大学は、実学重視の学問的伝統があるとされています。この「実学」というのはどういう意味でしょうか。一般的には2つの種類の意味があると思われます。

一つは「手に職をつける」学問。実務をこなしていく上で直接的に必要とされる知識やノウハウを学ぶことです。ビジネスに関わる専門用語やノウハウを学ぶ、ビジネスの仕組みを知る、コンピュータの使い方を覚える、外国人とコミュニケーションを図る力をつける、などがその例です。言ってみれば、それを身に付けていると「今日の実務」がうまくこなせる、という類のものです。この意味での「実学」に対するのは、いわゆる「純粋学問」でしょう。

もう一つは「机上の空論ではない」学問という意味合い。手に職をつける学問も机上の空論ではありませんが、ここで言っているのは、そういうことではありません。第一の意味の「実学」を別にすれば、普通、学問というのは「今日の実

務をうまくこなす」には役に立たないものとされています。そしてその普通の学問は、とすると「今日の実務をうまくこなすのに役に立たない」のみか、「実際の役には永久に立たない」ような学問になってしまうことがあります。机上の空論、あるいは空理空論というのはそのことです。しかしここで言っている第二の意味での実学は違います。「今日の実務」をうまくこなすのに役に立たないかもしれないけれども、別の局面では必ず実際の役に立てることができる、というものです。空理空論の方を「死んだ学問」とすれば、こちらは「活きた学問」です。

この第二の意味での「実学」が求められるのは、なにも一橋での学問に限ったことではありません。世の学者であれ大学生であれ、学問に関わる多くの人々に求められることだろうと思います。

私がこれから述べていくことは、この第二の意味における「実学」、つまり「活きた学問」とは何か、ということです。正確には、それについて現時点で私が考えたことを述べる、といった方がよいでしょう。学問のあり方を論ずるというのは、実際、いま私の手に余る大きな問題です。そのことはよく承知しているつもりです。しかし、手に負えないから考えない、ではすまされません。どこまで行けるかはわからないけれども、とにかく「活きた学問」について考えてみたということなのです。論題を「『活きた学問』について」として、「『活きた学問』とは何か」としなかったのもそのためです。

そうやって考えた(当面の)結果をこのような場で公にするのは、これから大学で学問を始めるみなさんが、自分自身が学問に臨む姿勢を考えるきっかけやヒントになればと思ったからです。この小論を読んでもらえばわかるように、学問(活きた学問)は、学者や将来学者になろうと思っている人に任せておけばよいというものではありません。みなさん自身に直接関わることなのです。

さて、冒頭、「学問」という言葉がどこか古い響きを感じさせるといいました。だからというわけではありませんが、古い「学問」について試してみることにしましょう。

「學とは、之を學ぶなり」

先日、調べ物をするので本学の図書館の書庫をうろうろしていた時のことです。目的の資料がある本棚のすぐそばに、立派な和綴じの本が何冊も並べられており、その中に『論語徴』という本がありました。『論語』の注釈書で、江戸中期の儒者、荻生徂徠が著したものです。いまだき和綴じに触れる機会などそうそうありません。物珍しさもあって手にとってみました。見ると、開いたページのある行に朱で傍点が打たれていました。

蓋先王之道安民之道也學者學之也

(けだし先王の道は、民を安んずるの道なり。學とは、之を學ぶなり¹⁾)

「先王の道」というのは、儒教が理想とする古代中国の（伝説上の）王、堯・舜・禹といった聖人たちが行った政治のあり方であり、その政治の要は「民を安んずる」、つまり人民が安らかに暮らせるようにすることにある。学問とは、この「先王の道」＝「民を安んずること」を学ぶのだ、ということです。これは論語の原文ではなく、徂徠自身の考えを述べた文です。

「学問とは、人々を安らかにする道を学ぶものだ」という主張の先には、「学問は人間の役に立たねばならない」という思いがあります。そんなことは当たり前にも聞こえるかも知れません。しかし徂徠が生きていた時代の事情は違っていました。

荻生徂徠が生きた江戸時代、幕府の官学として儒学の主流をなしていたのは、南宋の朱熹が大成した朱子学でした。朱子学は緻密で体系的なものでしたが、そのためかえて抽象的、教条的な議論をもてあそぶ「理論のための理論」「学問のための学問」になる傾きがありました。

徂徠はこの朱子学の儒教理解に異を唱えた人です。朱子学が『論語』をむやみやたらに抽象的に、あるいは過度に厳密に解釈したがるのに対して、「理を言い、智を喜ぶより、生きる方が根底的な事だ」という基本思想をもつ徂徠²⁾が、古代の中国語の語法まで研究して『論語』の原典に体当たりして生み出した解釈をま

とめたのが『論語徴』にほかなりません。

そうであれば、上で引用した「けだし先王の道は、民を安んずるの道なり。學とは、之を學ぶなり」は徂徠が声を大にして言いたかったことだったと言ってよいでしょう。そのことを十分に理解していたであろう、そこに傍点を打った人は、さらに「至言」という感想まで行の欄外に朱書きしています。

儒教の本場・中国で学んだことなど一度もない徂徠でしたが、彼が日本にいて自らの力で生み出した『論語徴』は、その後、当の中国の学者にも影響を与えればしばしば引用もされたそうです³⁾。

ただ、江戸時代の「学問」のあり方を、そのまま現代の学問のあり方に当てはめて考えることには問題がないとは言えません。当時の学問というのは、ほとんど儒学のことを指しており、そこでの「学問」は四書五経にはじまる、今日からみれば限られた数の古典をひたすら読んで読み込んで、それを吟味していくというものでした。しかし主として科学という現代の学問が対象にするのは、何らかの意味で実証可能な「事実」です。自然現象であれ、社会現象であれ、そうした「事実」というものを対象にする視点は、(江戸後期以降に西洋の学問が入ってくるまでの)近世の学問にはありませんでした。

しかも儒学は基本的には為政者のための学問と考えられており、「民を安んずる」といっても、それは為政者がその支配下にある人民を安んずるということにほかなりません。「支配者が民草を安んずるのが学問の目的だ」など言えば現代の感覚では違和感が伴います。

とはいえ、学問が空理空論に陥るのではなく、人間に役立つものでなければならぬ、という徂徠の言は、現代にも通じるといってよいでしょう。

これについてさらに議論を進める前に、これに関連した別の話をしておきましょう。

「我々の生活のために」

図書館を利用する上での最低限のルールの一つに「図書館の本に書き込みをしない」というのがあります。にもかかわらず、私は図書館の蔵書に朱の傍点のみ

ならず「至言」などというコメントまで書き込まれているという普通だったらとんでもない話を、いかにも興味深げに紹介しました。それというのも、私が手にした『論語徴』は、その書棚にある他の諸々の書物とともに、もとは個人の蔵書だったのが後に本学の図書館に寄贈されたものだったのです。自分の本に書き込みをしたのだったら問題ないでしょう。その書棚には、戦前の一橋（東京商科大学）で教鞭をとり、学長もつとめた三浦新七博士の旧蔵書（「三浦文庫」と呼ばれる）が収められており、私はその中の一冊を手にとったのでした。

大正後期から昭和のはじめにかけて、一橋学問の黄金期といわれる時代を福田徳三、左右田喜一郎、上田貞次郎らと共に担ったのが三浦新七でした。斬新でスケールの大きな歴史観を打ち出した「文明史」の講義はとても魅力的で、学内の教授陣や学外の学生までもが詰めかけて聴講したといわれます。

その三浦博士は「人が実地に役立てられる学問」を信条にしていました。昭和9年に本館26番教室で行われた「文明史特別講義」では次のような言葉を残しています⁴⁾。

「学問のための学問と言う如きことは、当時も、又今もなお、考えていない」

「自分のやっている歴史はどこまでも pragmatisch（実用的）の目的を持った、我々の生活のために歴史を研究するという態度であ〔る〕」

「我々の生活の上に於いて gelten [通用] するものだけを見つけるのである」

「実用的」という言葉が出てきますが、歴史研究のあり方についてのこれらの発言が、「はじめに」で述べた第一の実学（今日の実務をうまくこなせるのに役立つ学問）ではなく、「活きた学問」を言っているのは明らかでしょう。

このような信条を持っていたことに思いを致せば、三浦博士自身が先に引用した『論語徴』の一行に傍点をうち、しかも「至言」とまで書き入れたことも宜なるかなということになります。学問自体のあり方に関する徂徠の言に、母校の偉大な先人が大いに共感していたという事実に着かれるのは私だけでしょうか。そのとき「学問とは民を安んずる道を学ぶことだ」というのを「為政者が支配下に

ある民草を安んずる」などと狭く捉えて共感したのではないでしょう。

学問に対するこうした考え方を持っていたのは、もちろん三浦新七だけではありません。当時の大学、少なくとも一橋(東京商科大学)では学生の間にも教師の間にもこのような意識が盛り上がっていました。とは言え、三浦博士が講義の中でわざわざ上のような発言をしているということは、他方で「学問のための学問」に沈潜する人が一般には少なくなかったことを物語っているともいえましよう。こうした状況は日本に限ったことではなく、例えば当時のアメリカでもそうでした。

今年96歳になる J.K ガルブレイスは、著書『不確実性の時代』『ゆたかな社会』などで知られるアメリカの経済学者です。最近の自叙伝の中で彼がカリフォルニア大学バークレー校の大学院生だった頃(1930年代はじめ)を回想しています⁵⁾。「一般の経済学者で当時、最も尊敬されていたのは、社会的な目的にかかわらず、思索にふけるような人々」でした。ガルブレイスは農業経済学を学びましたが、そこでの議論は(幸いにも)そうした「思索」とは対照的に、「現実の問題にどう役立つかが中心だった」といいます。そこで学んだ経験から彼は「社会科学は、現実社会にどう役立つかで試されなければならない」という考えを強く持つに至ったということです。

〈人間〉が直面する問題を解決する

ここまで江戸時代やら昭和初期やらという昔の話をしてきましたが、それらの話に共通していた「人や社会に役立つ学問」というのは、現代の私たちにとってもむろん大切な心構えです。では「人や社会に役立つ学問」とは、もう少し具体的に言うとうどういう学問なのでしょう。いろいろな答えがあると思います。すぐに役立つ便利な知識やノウハウを授ける学問のことだという人もいるかもしれませんが。しかし私は「人間が直面する問題を解決する(のを目指す)学問」だと定義したく思います。これが本稿における「活きた学問」の定義でもあります。

どんな時代のどんな学問であっても、「人間が直面する問題の解決」という課題は「活きた学問」であるためには欠かせないのだと思います。以下では基本的

には社会科学を念頭に置いて話を進めていきますが、社会科学でなくても、哲学でも文学でも自然科学でも、この課題と切り離すべきではないのでは、と門外漢ながらも思います。どんな学問分野にせよ、この課題を体してこれに取り組んでこそ、学問が活きるのではないかと。

「人間が直面する問題の解決」という言葉を「人間」「直面する問題」「解決」の3つに分けて、節を改めて考えてみましょう。

〈人間〉に焦点をあてる

まず第一は「人間」です。一口に人間といっても、どんな分野を学ぶか、あるいはもっと特定の分野でのどんなテーマを学ぶかによって、いろいろな捉え方ができます。逆に自分は学問をするにあたって人間をどのような次元で捉えたいかによって、学ぶ分野やテーマを選ぶことになるという面もあります。両方向を行ったり来たりする中で、自分の学ぶべきテーマが徐々に明らかになってくるわけです。

「人間」の捉え方の基本は言うまでもなく一人一人の人間です。それぞれに内面世界をもつ一人の人間、社会の中に生きる一人の人間。そこに焦点を当てるということが一つです。

このようないわば微視的な視点とは対照的に人間を巨視的に捉えることもできます。儒者としての徂徠が使った「民を安んずる」の「民」という言葉は、言ってみれば被支配者（王に対する臣民、武士階級に対する農工商の民）という巨視的なくくりです。現在では「国民全体」、さらに広く地球上の「人類」というのが「人間」の大きな捉え方でしょう。

そこまで大きく広げなくても、いろいなくくり方で人間に焦点をあてることができます。ガルブレイスが農業経済学を学んだときに念頭に置いた「人間」は農民でした。教師という人々に焦点を当てることができます。他にも、有権者、納税者、貧困者、消費者、病人、犯罪被害者、……。

さらに一定の目的をもって集まった人々の「組織」という切り口もあるでしょう。政党、学校、企業などがあげられます。ただ、企業にせよ、政党にせよ、組

織を「人間」そのものと捉えるわけにはいきません。しかし組織が直面する問題は、その組織を構成する人間、あるいはその組織に利害関係をもつ人間の問題にはかなりません。例えば企業の業績がふるわないという問題に直面している真の主体は「企業」ではなく、そこで働く人々でしょう。

少し乱暴かもしれませんが、そうした組織や社会、人類も含めて、以下では〈人間〉と表記することにします。自然人としての個人だけを指すのではないことに注意してください。

問題を見出す

次に「直面する問題」について、どのような〈人間〉に目を向けるかによって、様々な問題の種類があり得ます。個人の次元で捉えれば、自分の生きる意味、他人とのつきあい方、社会的な規範との「つきあい」方。人類全体という大きな視点に立てば、地球環境をどう守るか。農家が天候や農産物価格の変動というリスクに対処して安定した生活を実現するにはどうすればよいのか。社会における貧困をいかに減らすか。企業はどうすれば競争に勝ち、必要な利益をあげ、維持・発展していくことができるのか。

これらはいうまでもなくごく一例です。〈人間〉は必ず何かしらの問題と向き合っています。そうであれば、自分が興味をもつ〈人間〉についての「問題を見つけること」が、じつは学問をする上でまずは必要になってきます。そのためには〈人間〉にまつわる現実を、常日頃から注意して観察していなければなりません。家庭生活やクラブ活動、買い物、そしてただこの世に生きていることそのものを通じて自分が直接見たり聞いたり感じたりする出来事や悩み、あるいは新聞、雑誌、書物で間接的に知る政治や産業・企業の動きやそこで当事者たちが頭を悩ませているであろうこと。知的好奇心のアンテナを張り巡らせて、そうした様々な「現実」を自分自身の中に吸収していくことがまず第一に必要でしょう。

授業にとりわけ積極的に参加しているという印象を私が受ける学生の多くは、このような習慣を身につけている人たちであるようです。逆に言えば、現実に対する問題意識をまるで持たずに、前向きに授業に参加することは難しい場合が多

と思います。もっとも、講義で知る新しい知識や情報そのものが面白いとか、教師の話術に引き込まれるということは十分にありますが、必ず難しいとは言えません。しかしそのような場合でも、授業で得たものを本当に自分で活かしていくためには、何かしらの問題意識をもって授業に臨むことを勧めます。このことは授業だけでなく、一人で本を読むときにも、友人と議論するときにも、そして何より学問をする上でも、当てはまります。

ところで「〈人間〉が直面する問題」と聞くと、当事者が現に認識している困難や不安をまずは連想されるでしょう。もちろんそうした問題も大切です。しかしそれだけではありません。

第一に、現在は問題とはなっていないけれども、このまま行くと、未来のある時点で「直面する」ことになる問題、いわば将来的問題があります。これを筋道を立てて予め提示できれば、問題の顕在化を未然に防いだり、実際に直面したときの解決が容易になったりします。例えば、少子高齢化が進む中で「年金など社会保障費の財源不足」が大きな問題となっています。一部顕在化している問題もありますが、将来に向けてより大きな問題に発展することは確実です。

第二に、当事者は大して問題だとも思っていない、あるいはそれを（気づいていると否とに拘わらず）問題にさえしていない現在の問題というものもあります。その中には取るに足らない問題もあるでしょうが、かたやその問題を認識し十分に吟味しないと困った事態に陥りそうだとか、問題の吟味を通じて将来より多くの望ましい成果を得ることが可能になる、といった類の問題もあります。

例えば子供たちにとっての、家庭を含めた教育のあり方、情報技術の進展やコンピュータゲームの生活への浸透などが与える影響。こういった問題は当事者である子供たち自身が客観的に認識することはないので、私たち大人がそれを取り上げ、吟味する必要があります。

子供ならぬ大人の世界でも見過ごされている問題—しかも取るに足らないとは言えない問題—が往々にしてありそうです。ごく身近なところでいうと、私たち大学関係者は、いまの大学が直面している何か重要な問題を見過ごしていないとも限りません。私たちがなりに問題の抽出はしているつもりですが、もしかしたら

何か「本当に大切な問題」を見落としているかもしれません。大学について最も多くの情報を持っているはずの私たちでさえ、そうなのです。

同じようなことは、企業についても言えるでしょう。ある企業の現状がどうなっているかは、その企業で働いている人たちが一番よく知っているはずで、新入社員にはわからないでしょうが、中堅社員や管理職、社長以下の役員たちは知っています。自分の企業がどんな顧客や競争相手、供給業者と取引しているのか、自社がどのような技術をもっているのか、社内でのコミュニケーションはどのように行われているのか、どんな人たちがどんなパワーを握っているのか……。そこから自社にどんな問題が生じているかもよく認識しています。しかしそれでもなお、本当に大切な問題が見落とされたり、等閑に付されたりしていることがないとは言えません。

単に現実を知っているだけでは、種々の問題に気づくことはあっても、その中に潜む「本当に大切な問題」がクローズアップされないかもしれないのです。ある〈人間〉にとっての「問題」は決して一つではありません。複数の問題があって、しかもそれらが互いに階層構造をなしたり、絡み合って影響を及ぼしあったりしています。それら一群の諸問題の根底にあって、そうした絡み合いをほぐす糸口になるような「本当に大切な問題」をここでは「問題の本質」と呼びましょう。

〈人間〉が現実直面するいろいろな問題を知ることがまずは必要と先ほど述べましたが、最も大切なのはそれら一群の諸問題のなかにある「本当に大切な問題」つまり「問題の本質」をつかむことです。と、口で言うのは易しいのですが、ある特定の問題群のただ中において詳しい情報を持っている当事者さえ見落とすことがある「問題の本質」などというものを、いったいどうやってつかむのでしょうか。

じつは学問の役割がここにあります。〈人間〉が直面する問題の本質をつかむための営みこそ、学問の中核的役割と言ってよいかと思います。本質へと至る道を用意し、その道を自ら歩き遂げる営みが、学問をする人には何よりも求められるかと思っています。学者だけに限りません。みなさんが大学で学ぶ狙い、少なくとも

「活きた学問」を学ぶ最大の狙いもここにあります。

こうすれば本質をつかめます、などというお手軽な虎の巻はありません。ただ言えることは、そのためには様々な要素が複雑に絡み合った現実を解きほぐして、「いったい今なぜこういうことになっているのか」、さらには「この先、事態がどのように進んでいくことになりそうか」を説明するストーリー、言い換えると、複雑な現実の背後にあるメカニズムを明らかにすることが欠かせないということです。メカニズムがわかると、「あ、ここが一番のキモなんだな」といったことが見えやすくなるはずです。

しかしそのメカニズムというのもまた、それを見つけるお手軽な方法はありません。メカニズムは現実の〈人間〉が身をおいている特定の状況のなかに備わっています。それぞれの状況に即して、自分で見つけなければなりません。

みなさんは社会に出てから、いやそれどころかいまこの一橋大学で学生生活を送っているさなかにも、様々な問題に直面します。それにきちんと対処するための第一歩は、その出来事のメカニズムを、別の言い方をすればその「成り立ち」を一貫した視点で把握することです。

大学で学ぶことは、自分の力でそれを行うための道具を手に入れることにほかなりません。大学の授業やゼミではそれぞれの分野に関するさまざまな専門知識を学びます。ただ、それは知識そのものを身につけるのが目的というよりは、むしろその知識を使って、自分が、あるいは〈人間〉が、直面する問題の成り立ちを理解し、問題の本質をつかむことを標的とすべきです。

もっとも、そうしたことを学ぶのと並行して、大小さまざまな現実の問題を知ることすら疎かにはできません。それなしにいきなり「問題の本質は何か？」などと問うのはナンセンスです。大小さまざまな問題を知る中から、問題の本質を見つけていくのが筋道であることは言うまでもありません。

解決に向けて：学問と実践

とはいえ、「活きた学問」とは〈人間〉が直面する問題を解決することが目標のはずなのだから、単に問題の本質をつかめればそれでよいということにはなら

ないのではないか。一面では確かにその通りですが、しかし結論から言うと、問題の本質を明らかにできさえすれば、「活きた学問」はその役割を果たしたと言っただけでよい、と私は考えています。では、解決策を提示することは学問には無用なんでしょうか？そんなことは決してありません。

一見矛盾した物言いですが、こういうことです。問題の本質を浮き彫りにすることと、問題の解決策を示すことは、別々のことではありません（「問題の解決策を示す」と言っているのだから、「問題が解決する」ではない点に注意してください）。

まず第一に、解決策を示そうという志向がない限り、問題の本質は見えにくいのです。同じことですが、問題の本質を見出そうとするときには、問題をどう解決するかということをも一どの程度明確に意識するかはともかく一念頭に置いていなければなりません。解決策のことなど本気で考えることなく問題だけを論じたのでは、本質を突くことは難しいでしょう。「評論家的な態度」という言葉には、こうした含みがあります。

第二に、見出した「本質」を起点にして解決の筋道を考えてみることは、それが本当に「本質」といえるかどうかを、自分自身で確かめ、納得するために必要なことです。

以上の2つのことを考えると、「問題の本質を真に見出したときには、すでにそれを元にした解決策が出てきている」と言えるのではないのでしょうか。こう言い切ってしまうのはやや直截にすぎるかもしれません。「これが問題の本質だ」とわかったときには同時に解決策が明示的に目の前に揃っている、などという都合のいい話があるか？と訝しく思われるでしょう。しかし少なくとも解決策の輪郭がほの見えている、ということは十分あり得ることです。そうでなければ、本質がわかったとは自分でも思えないでしょう。

場合によっては、本質と解決策がワンセットで出てくることもあります。もっと言えば、先に解決策を直感して、そこから遡って問題の本質なりそのメカニズムなりを展開していくという流れもあり得えます。そのときはむしろ直感した解決策が正しいかどうかを確かめ、納得するために「学問」が必要なわけです。そ

うやあって確信を得た解決策なら、自信をもって断行していくことができるでしょう。

しかしここで一つ厄介なことを指摘しておかねばなりません。問題の本質から割り出すにせよ、天才の直感が啓示するにせよ、それらがみな「これが正解だ」という唯一絶対の解決策に収束することにはならないのが普通なのです。それどころか、ある問題の「本質」でさえ、「正解」が一つだけ存在しているとは言えません。

「人はいかに生きるべきか」という人の価値観の根幹に触れる問題についてであれば、唯一絶対の正解はありえない、ということも納得しやすいでしょう。ならば社会科学が対象とする社会現象なら価値判断から離れて一つの正解が決まるのかというと、そんなことはありません。例えば、「日本の株式市場が長期の低迷から抜け出せないでいる」という問題の本質、このいろいろな要素が複雑に絡み合った問題を解きほぐす糸口として確からしいものは、(たくさんはないにしても)いくつかありえます。

一般に、世の中の現象、そこから生じる問題の「本質」や解決策は、それを見る視点の置き方に応じて、様々にあり得ます。だからといって、「人それぞれの見方があるのだから、本質や解決策を考えたい人が自分なりに考えればそれでいい」というわけにはいきません。妥当性の高い視点の置き方もあれば、低い置き方もあります。そしてある程度以上の高さの妥当性をもった視点から浮き彫りにされた本質や解決策であればこそ、その問題を実際に解決するのに大いに役立つはずです。そこに学問の出番があります。

学問が唯一絶対の答えを提供する(すべきだ)ということではないのです。そもそも〈人間〉は唯一絶対の本質や解決策が見つからなければ自らが直面する問題を解決できない、などということはありません。そんなものはないとしても、人間は問題を解決してきました。だからといって「学問などという小難しいものは必要ない」ということではありません。必要なのは一貫したものの見方です。

まぐれで解決できることもありましようが、妥当な視点からある一貫したものの見方によって問題の本質と解決策を導き出し、それを指針として、時にはそれ

を自信の源ともして、現実の事に当たったとき、よりよい解決に近づけるはずで
す。直面した問題に対して「唯一の」正解を見つけようとするのではなく、
「一貫したものの見方」ができることが肝心です。徒手空拳でこれをやるのは大
変です。とりわけ錯綜した厄介な問題に直面しているさなかには極めて難しい。
学問が生きて力になるのは、そういうときです。そして大学とはそうしたものの
見方を鍛える場なのです⁶⁾。

学問とは、どんな状況であれそうしたものの見方を堅持して、より確かな問題
の本質と解決策を提示する営みであり、大学はその能力を鍛える場であるという
ことができると思います。

いずれにせよ、問題の本質やそれに応じた解決策は一つに決まるのではないに
しても、ある問題の本質が筋道立てて明らかにされたのなら、解決策もある程度
は見えているはずなのです。「何が問題かがわかればその問題は解決したような
ものだ」「問題が正確に立てられれば解決したも同然」という言葉は、このこと
を言っているのでしょうか。そしてまた、〈人間〉が直面する問題を解決する上
での一番の関門が、問題の本質を突き止めることにあることをも物語っています。
ただし、それによって「解決したも同然」ではあっても、「解決した」わけでは
ありません。これについてはすぐ後で述べることにしましょう。さしあたり、こ
こまでのまとめです。

学問は〈人間〉の直面する問題、しかもその本質を明らかにすることを中核的
役割とし、その役割を果たすことが解決策を見出すことと密接不可分の関係にあ
る、というのがここまでの話でした。学問はもとよりそれを職業としている学者
が懸命に取り組むべきものですが、その学者自身も含めて、組織の経営にせよ、
商取引、政治、ボランティア活動、友達づきあい、どんなことであれ、実際の事
にあたるいかなる人にとって意味を持つはずのものです。少なくともその人が仕
事、家庭生活などの自分の生活を立派に果たしていきたいと願う限りにおいては、
逆にそれがなければ、学問(活きた学問)に身を入れようとするのは難しいで
しょう。古くから学問の第一歩として立志が強調されるのもそのためです。

ただし、学問をすれば公私にわたる生活で直面する問題がなんでも解決できる

ようになるわけではありません。「学問が万能でない」とはいつでも、どこでも言われることです。私は「活きた学問」を「〈人間〉が直面する問題を解決する」とことと定義しましたが、「学問だけで完全に解決できる」というつもりで言ったわけではありません。

学問自体の内なる限界、つまり本当に妥当性の高い本質や解決策を提示できているとは限らないことも一つにはあります。他方、ある程度の解決策が出たとしても、それだけで現実の問題が本当に解決するはずはありません。当たり前のことです。そうした策を実行に移していかなければ、現実動きません。そのところ、つまり「実践」のところは、現実の問題のただ中にいる当事者がやるしかありません。しかしまた、その実践をしていく過程で問題が発生してきます。そこでまたその問題の本質を探究することが必要になります。

そもそも人間が直面する問題が学問を必要とするのですし、学問はその成果が実践されることではじめてその究極的な目的（問題を解決する）を達することになります。また、学問を根底で支えるのは実践の経験です。それゆえ学問と実践は対立するようになって見えても、じつは一体なのだと思います。

もちろんまっとうな実践が学問だけで可能になるはずはありません。よく言われることですが、学問以外にも勇気、誠実さ、忍耐強さ、使命感、といった諸々のものが必要とされます。じつは、これらの徳の涵養もいま「学問以外」といっていましたけれども一学問と切り離して扱うべきではない、と私自身は考えていますが、この点は別の機会に譲ることにしましょう。

おわりに：自身の問題として

「実学」を「活きた学問」ととらえて、「では活きた学問とは何だろうか」ということについて私が考えたことをこの稿では述べてきました。それとの関わりで、大学で学ぶことの意義についても論じました。

この小論を締めくくるにあたって、みなさんが実際に大学で「活きた学問」をしていくためのヒントになりそうな心構えを1つだけ示しておこうと思います。それは一言で言うと「当事者意識を持つ」ということです。

身の回りの様々な問題を自分自身の問題として見て考えるのです。それによってただ漫然と問題を眺めるのではなく、「どうやったら解決できるか」を考えるようになるはずで、すでに述べたように、解決を志向しないことには問題の本質は見えてきません。そして問題の本質を見抜くことが学問の中核的役割なのです。

大学の授業やゼミにもそういう意識で臨むとよいでしょう。とはいえ、大学で学ぶ社会科学の扱う題材になんでも当事者意識を持つというのは難しいでしょう。だいたい学生が現に文字通りの当事者であるような問題は、あまり扱いません。みなさんは企業で働いている人でもなければ、経済政策や社会政策を担当している人でもないし、法律家や裁判の原告・被告でもない。

それゆえ、当事者意識を持ってそうな、興味を抱けるテーマを選ぶということが大事です。

しかしながら反面、世の中の多くの問題は、一見自分には関係ないように見えても、自分自身に引き寄せてみるができるというのも事実です。

そのための方策はいろいろあります。「明日は我が身」と考えたり、人としての真正な同情心をもつことによって他人事として片づけられない、というのも一つでしょう。そのときには想像力の働きの欠かせません。それと並んで、いやそれ以上に、自分自身が今しも直面している問題、もしくは強く興味を持っている問題と関連づけて、他人事に思える他の問題を見るのも有力な一法です。

例えば私が専門にしている企業統治論では、経営者がその企業の従業員や株主、債権者、地域社会などといった利害関係者とのどのような関係を築くことが、企業の長期的な維持・発展のために望ましいか、というのが主要な問題の一つになります。この問題自体に当事者的な興味を強く抱くという学生は多くないでしょう。それでも私が授業でこれについて話をすれば、みなさんは一応ノートを取り、理解しようとしてくれるはずで、その内容が試験にでるから、単純に興味をそそられたから、理由は様々です。なかには将来、自分が企業に勤めたり経営者になったときに何かの足しになるかも、と思っている人も絶無とは言えないかも知れません。

しかしこの問題を真剣に考えることは、企業のことにはあまり関心を抱けないという人にも、自分に即した問題を考える材料を提供できると私は思っています。例えば、政治のことには興味があるという人。国の政治を考えたとき、それを託された行政の長が、自分の足下の行政機構はもとより、立法府や司法府、そして何より自国民、はたまた国情のさまざまに異なる諸外国とどのような関係を築けばよいか、という問題につながります。

政治の話だけではありません。個人が社会で生きていく上でも、似たような構図を想定できます。自分の周りには、自分を慕ってくれる人、助けてくれる人、自分が世話をしあげべき人、圧力をかけてくる人、行く手を阻む人、普段は疎遠だけれども無視するわけにはいかない人、いろいろな人がいます。もちろん一人の人がこれらの複数の顔をもっているでしょうし、時間とともに顔が変わってくる（例えば昨日まで自分の行く手を阻んでいた人が今日は助けてくれる人になる）こともあります。そうした様々な人々の間で、自分が満足にあるいは立派に生きていくにはどうしたらいいのか。

上で紹介したような企業統治の議論は、それを個人や国家の問題にそのまま適用することはもとよりできませんが、そうした問題を考えるのに大いに裨益すると思います。

一つ言えることは、自分の生き方の問題と結びつけるという視点をもつと、ずいぶん多くの事柄を自分自身に引き寄せることができるということです。そうすることが翻って学問を活きた力強いものにもしてくれるはずです。

学問は生きることと決して別々のことではないのです。それが「活きた学問」である限りは。

- 1) 読み下しの出典は、小川環訳注『論語徴1』平凡社、1994年、24頁。
- 2) 小林秀雄『考えるヒント2』文藝春秋、1975年、53頁。
- 3) 吉川幸次郎『論語について』講談社、1976年、171頁。
- 4) 以下の引用は学生時代にこの講義を聴講した増田四郎教授（元学長、故人）が自らとられたノートに基づいています。このノートは現在、図書館に「貴重図書」として収められているそうです。本稿では、このノートを中路信氏が現代仮名遣いに

改めてワープロ文書におこしたものが掲載されている <http://www.mercury.ne.jp/dec-club/MIURAKOUGIROKU.htm> から引用しました。

- 5) 以下の記述ならびに引用は日本経済新聞2004年1月5日付、「私の履歴書 J.K. ガルブレイス ④」によります。
- 6) 大学をこのような知的訓練の場ととらえる見方は、むろん私だけのものではありません。多くの先人やいま現在研究・教育に携わっている方たちがそれを強調しています。例えば、前掲注4でも名前の出た増田四郎『大学でいかに学ぶか』講談社、1966年は、大学での学問の究極的なねらいを、まさに「一貫した立場、ものの考え方」によって自分の周囲のさまざまな現象をとらえる練習をすることにある、としています。

(一橋大学大学院商学研究科助教授)